

カントとハチスン再考

スコットランド常識学派におけるハチスン受容の射程

高畑菜子(新潟大学大学院現代社会文化研究科博士課程)

カント倫理学の成立過程において、フランシス・ハチスン(Francis Hutcheson, 1694-1746)が大きな影響をもったということは、いまや定説となっており、今日それを否定する研究者はいないだろう。一連の倫理的著作において、カントが初めてハチスンについて言及したのは、1764年の『自然神学と道徳の原則の判明性』(以下『懸賞論文』と略)である。『懸賞論文』は、イギリス道徳哲学の影響が認められるカントの最初の著作と言われている。そのなかで、カントは無条件の追従ではないものの、ハチスンらモラル・センス学派が、道徳の根本原理に対して「すぐれた所見の端緒」(II, 300)を与えたと評価している。

『懸賞論文』は、カントが初めて本格的に倫理学について論じた著作としても知られている。その最終節である第四考察において、カントは倫理学にとって根本的と言える課題を提示している。それは「実践哲学の第一原則を決定するのは、たんに認識能力であるのか、それとも感情(…)であるのか」(II, 300)というものである。この「認識能力か、感情か」という問いの背景にあるのは、ヴォルフやクルージウスといったドイツ講壇哲学と、シャプツベリやハチスンといったモラル・センス学派の思想の対立である。カントに対する両者の影響については、すでに多くの研究者が論じている。なかでも、D・ヘンリッヒの研究は、従来の諸説に対して新しい観点からハチスンの重要性を認めたという点で先駆的であり、いまや古典的な研究と言える。

ヘンリッヒは、従来の解釈がカントの著作のなかでのみハチスンを理解しようとしているとして非難している。それを解消すべく、ヘンリッヒは、カントが用いたハチスンの著作にあたり、ハチスンの思想の核心に迫ろうとした。こうした試みは、ハチスンの「モラル・センス(moral sense)」について正確に把握することを可能にしたばかりか、カントにおけるハチスンの影響を検討するうえで、極めて重要な役割を果たしていると言えるだろう。ヘンリッヒによれば、カントが「自らをハチスンに結びつけるのは、一方でハチスンが判断を越えて満足(complacence)への直接の関係が含まれているような道徳現象そのものの特殊性を指摘していたから」である。「モラル・センス」は、「道徳的なものの根源的内面性」を我々に知らしめるものであり、「通常の意味での感情ではなかった」のである。ヘンリッヒによれば、こうした「モラル・センス」の独自性によって、カントはハチスンに注目したのである。

1760年代のカントがハチスンの「モラル・センス」から大きな示唆と影響を受けているということは、『1765-1766年冬学期講義計画公告』における次の一節からも伺える。「行為における善悪の区別、道徳的な正当性に関する判断は、じかに証明という回り道なしに、人間の心によって、感情と呼ばれるものを通して、容易に正しく認識される。それゆえ、問いはたいてい理性的根拠を持ち出す前にすでに決着がついている」(II, 311)。カントによれば、「シャプツベリ、ハチスン、およびヒュームの試みは、未完成で欠点はあるが、にもかかわらず、すべての人倫性の第一根拠の探究においては、もつとも遠くに達している」(II, 311)のである。

しかしながら、こうした道徳感情論に対するカントの評価は、批判期の著作では一転して否定的なものになる。多くの研究者が

指摘するように、カント倫理学の発展史において転換期となるのは、1770年の『可感界と可想界の形式と原理』(以下『教授就任論文』と略)である。というのも、『教授就任論文』において、カントは純粋悟性以外に判定の第一原理を決定するものはないとして、感情が善悪の判定の原理であるとする考えを斥けるからである。一般に、カントによる「道徳感情」という概念の使用は、1770年以前と、それ以降の二つの段階に分けられる。1770年以前のカントは、ハチスンの影響を受けており、道徳の第一根拠を「モラル・センス」において見出そうとしている。それに対して、1770年以降のカントは、一方ではモラル・センス学派を批判し、他方では自らの倫理学構想の枠において、自身の「道徳感情」という概念を構築するのである。

こうしたことから分かるように、ハチスンの「モラル・センス」は、カント倫理学全体にとって重要な概念である。しかしながら、前批判期におけるハチスンの影響は、すでに研究者の間で共有されているがゆえに、それを再考しようという研究は、あまり見受けられないように思われる。もちろん、ヘンリッヒの研究以降、それを受け継いだかたちで、古くはJ・シュムッカーやM・フォルシュナーといった研究者によってカント倫理学成立史の研究が展開されているし、最近ではカントとスコットランド常識学派(Scottish Common Sense School)についての研究も進んでいる。とはいえ、スコットランド常識学派についての研究は、そのほとんどが認識論に関するものである。また、カント研究の一環として、イギリス道徳哲学を扱う論考は、カント倫理学発展史内の研究や、ハチスンとカント、ヒュームとカントというような、その影響を個別に考察する研究が主流である。

本発表では、まずヘンリッヒが行なったように、カントにおけるハチスンの影響を、その著作にあたって再検討する。さらに、それを踏まえたくえ、スコットランド常識学派におけるハチスンの受容と批判について考察する。主に、ケイムズ卿(Henry Home, Lord Kames, 1696-1782)、トマス・リード(Thomas Reid, 1710-1796)といった哲学者を取り上げる。ケイムズの『道徳性および自然宗教の原理(Essays on the Principles of Morality and Natural Religion)』(1751年)は、のちのスコットランド常識学派の主要な特徴のほとんどを見出すことができると言われている。この著作は、第一部で道徳論を、第二部で認識論を取り扱っており、第一部のなかで、シャプツベリやハチスンに対する批判がなされている。また、トマス・リードは、カントの倫理的な主著と時を同じくして、『人間の知的能力(Essays on the Intellectual Powers of Man)』(1785年)と、『人間の能動的な能力(Essays on the Active Powers of Man)』(1788年)において、道徳の問題について論じている。本発表は、こうした著作に取り組むことで、スコットランド常識学派において、ハチスンがどのように受けとめられていたのかを明らかにすることを試みる。それによって、カントによるハチスンの受容と批判が、当時の他の哲学者からみて、どのようなものだったのかを示すことが可能となり、カント倫理学におけるハチスンの位置づけに新たな解釈を提示することができるだろう。